令和５年度の学校評価結果と令和６年度の推進策について

学校評価は、教育活動や学校運営などの改善・充実を図り、より質の高い学校教育の実現をめざして行うものです。

今年度も本校では、生徒・保護者・地域を対象とした学校関係者評価アンケートを実施しました。また、校内でも、第２次世田谷区教育ビジョン及び学校経営方針に基づいた点検・評価を行い、こうした結果を学校関係者評価委員会に提出しました。

このたび受け取った学校関係者評価委員会からの報告書と本校の自己評価を踏まえ、「令和５年度の成果と課題」・「令和６年度の学校経営推進策」について、お知らせします。

令和５年度の成果と課題

Ⅰ　重点目標について

（1）生徒の主体的な学びを支え、学びの自立を図る。

学校関係者評価アンケート生徒対象設問「先生は、課題について自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。」（肯定的評価 89.3%　前年度比較＋7.4%）、教員自己評価「学びに向かう力を高める工夫をしている。」（肯定的評価 95%　前年度比較＋13.2%）は共に、この目標の達成に関わる設問であり、昨年度より数字の伸びが目立つ結果になった。生徒一人ひとりの学びの自立を図るためには、学校の総力が必要である。今後は、学習ガイダンスをより充実させたり、学校で行う補習教室などへの参加を促したりすることで、生徒対象設問「私は計画的に、粘り強く学習できるようになってきたと思う。」（肯定的評価 61.7%）を高めていくことが大事だと考える。

（2）これからの社会に必要な社会性を身に付け、さらに伸ばしていく。

本校は、「あいさつ・時間・意思決定」を社会生活に直結する３要素と捉えている。学校関係者評価アンケート生徒対象設問「私は、先生、友だち、面識のある保護者・地域の方々に対して、日ごろあいさつができている。」（肯定的評価 85.5%）は、平年並みの結果であった。時間を守ることについては、毎朝、始業ぎりぎりの登校生徒は少なくない。「間に合う」から「多少でもゆとりをもつ」に意識と行動を変化させたていきたい。各家庭の協力も必要である。また、本校では昨年度から、学校のきまりの見直しを、生徒が話し合って進めることを大切にしている。生徒対象設問「先生は、学校での過ごし方やルールを生徒に考えさせて指導している。」（肯定的評価 78%）と「私は、学校での過ごし方やルールについて考えて行動している。」（肯定的評価

87.9%）が、より高い数値で両立することが、とても大事である。

(3)自らの学習や生活を中・長期的な視点で見つめ、キャリア発達を促す。

今年度は、コロナの５類移行に伴って、４年ぶりに２年生の職場体験が復活できた。自分を社会との関わりから見つめる絶好の機会となったはずである。一方、学校関係者評価アンケート生徒対象設問「私は、自ら進んでボランティア活動に関わろうと心がけている。」の肯定的評価は、３年生は75%を超えたものの、１．２年生は50～60%程度の数字であった。同様に、保護者と地域対象の設問「生徒たちは、自ら進んでボランティア活動にかかわろうとしている。」の肯定的評価は43.8%、71.4%と、いずれも昨年度を下回る結果であった。コロナによる行動制限がなくなったこのタイミングで、学校で行うボランティア活動の意義をしっかりと説明したり、地域との関わりを促したりして、自己のキャリア発達を促すことが必要だと感じている。

Ⅱ　保護者・地域からのアンケート結果から

（１）保護者アンケート

昨年度、学校関係者評価アンケートは二次元コードを使用した回答方法に変更になった。利便さはあるものの、結果的には多くの学校で回答率が大幅に下がり、本校は２１％の回答率であった。本年度はその挽回を図るべく、協力依頼を繰り返し行い、PTA を通じた依頼も行った。その結果、回答率は５７％まで回復し、多くの方の思いを反映できるアンケートに近づけたことを感謝したい。

アンケートの項目から見ると、「生活指導」「学校行事」「部活動」に関しては、すべての設問で３分の２以上の肯定的回答が得られた。一方、３設問ある「家庭と学校の連携」の項目では、どれも否定的回答が３９％～５０％に上った。肯定的回答が最も多かった設問は「学校行事は子どもにとって楽しい。」（86.8%）であり、否定的回答が最も多かった設問は、「子どもは、家庭や宿題で、e ラーニングなどで学習している。」（50.6%）であった。

（２）地域アンケート

紙によるアンケートを実施し、回収率は70.3%（前年度比＋6.7%）であった。昨年度以上の回答を寄せていただいた地域の皆さんにも感謝をしたい。

「学校からの知らせ（学校だより）などにより、学校の様子がわかる。」の設問に対しては、100%の肯定的回答が得られたが、「学び舎の活動について、情報提供されている。」の設問の否定的回答は、23.8%あり、否定的回答が最も多かった設問となった。

「わからない」という回答が30～40%を占めた設問が複数あり、設問に課題があると感じている。

令和６度学校経営推進策

1　主体的で粘り強い、学習推進力を育てる。

知識や技能の獲得に偏ることなく、考えることやアウトプットすることを重視した学習活動を積極的に行う。教員が、教科横断的な視点をもって授業を行ったり、生徒が話し合い活動や iPad の効果的な利用をしたりすることによって、学び方を学べる授業の実現を図り、絶対的な答えのない問いに向き合える力を養う。

2　生徒の考えを反映した学校生活を実現する。

本年度生徒会サミットで本校生徒会が発表した「学校をよくするための２ヶ条」と学校の重点目標を基に、学校生活の過ごし方を生徒と教員が一緒に考え、学校のきまりを再構成する。整理したきまりを守る指導を、自信と責任をもって行う。

3　生徒との対話的な関わりを大切にする。

日常的に、昼休みの時間を生徒と教員が対話できる時間として大事にしていく。また、本年度３学期に行った１・２年生の教育相談（二者面談）を次年度も継続し、新年度のよいスタートにつなげられるようにする。また、夏休みの最終週には、自習教室と並行して教育相談期間を設け、２学期を迎える生徒の不安にも応えられるようにする。

4　キャリア教育の充実を進める。

毎週火曜日の朝学習で行うコミュニケーションタイム（対話・会話のスキルを高め、考える力と表現力を高めるための時間）を２年生でも行い、全学年の完全実施とする。地域の教育的環境（地域で働く方々・区内高校や大学）を活かして、生徒が、「自分の進路や将来に役立つ。」と感じることができる学習場面を増やしていく。総合的な学習の時間では、将来と世界に目を向けながら、「学ぶこと＋働くこと＋楽しむことが自立と幸せに結びつく」と捉え、学習内容を精選していく。

5　杜の学び舎の子ども間の交流機会を担保する。

職業に関する学習後に保育園でのボランティア活動を紹介したり、地域の催しでのボランティア参加を促したりして、子ども同士の交流機会の幅を広げていく。夏休み中に小学生の部活動見学を可能にするなど、直接・間接を問わず、ポストコロナに合った、学び舎の児童・生徒が求める交流像を探る。

6　生徒の特性に合った特別支援教育を創る・

２つの特別支援学級それぞれの生徒特性に合わせて、指導内容や指導体制を整える。F 組は「小集団の中で人との関わり方を学ぶこと」を重点目標の１つとし、自分の考えや意見を発表し合うコミュニケーションタイムを朝学習の時間に新設する。この活動には、教員や支援員が積極的に関与する。I 組は、人間関係の形成に重きを置き、仲間と力を合わせて取り組む実体験を交えた学習を取り入れていく。I 組生徒の多様性を踏まえ、一人ひとりが安心して学校生活を送れるよう、全学年複数担任制で学級運営を行う。

7　働き方改革を推進する

教員の就労時間の長さは、早急に改善しなければならない喫緊の課題である。学校の判断でできることを、小さなことでも１つずつ着実に行っていく。その際、「働き方改革は、これまでの教員の働き方を改めることと、教育の質を高めることを両立させることが趣旨である。」ということを決して疎かにせず、進めていく。

次年度は、具体的に次の３点を推進する。

（１）各種検定に備える講習会を学校で実施し、本校を会場として受験できることを願う保護者の割合は高い。一方、正規の授業以外の活動に関わる教員の負担感は大きい。そこで、事業の実施のための事務や集金を SSS（スクールサポートスタッフ）や学校支援地域本部に委託していく。

（２）学校からの発出文書のペーパーレス化を進める。紙文書として配布するものは、極力その必要性があるものとし、それ以外はすぐーるで配信する。

（３）現在２２名いる部活動外部指導員をさらに増員する。近隣大学との連携を一層強化したり、地域人材を発掘したりして、安定的な人員確保に努める。